

ポローニア

p a u l o w n i a

筑波大学附属学校教育局
広報誌 ポローニア

令和4年5月31日 発行
通巻第54号

54

【巻頭言】 附属学校教育局次長 雷坂浩之「新たな「文化」の創造を期待して」

- 2 ●附属学校教員研修会・研究発表会を開催しました——宇留野安紀子
- 3 ●筑波スタディ1スタまとめ——速水高志
- 3 ●ようちぶまつり——三浦佳菜江
- 4 ●画面の向こうからの参加——森本隆史
- 4 ●思い出作ろう、お別れ遠足——若林季
- 5 ●「ミライの体育館®」を使った交流及び共同学習——田上幸太
- 5 ●駒場の探究—教科の枠にとらわれない授業—イネを通した学び——内山智枝子
- 6 ●本年度から制服が新しくなりました——深澤孝之
- 6 ●卒業・修了:新たなステージへ——鎌田ルリ子
- 6 ●令和3年度 理療科教員養成施設
臨床専攻生・理療研究生修了式、施設学生卒業式——徳竹忠司
- 7 ●第50回肢体不自由児教育実践研究協議会を終えて——橋本陸
- 7 ●3年生ファイナルコース——関谷文宏
- 8 ●第17回「科学の芽」賞 募集要項



「附属駒場中・高等学校R3年度文化祭立て看板作品」



駒映像研究会



折り紙研究会



1年4組



音楽部

新たな「文化」の創造を期待して

附属学校教育局次長 雷坂浩之



HIROYUKI
RAISAKA

本年度も、附属学校群全校においては、幼児児童生徒1195名の新入生と62名の教員を新たに迎え、いよいよ新学期がスタートしました。新入生の皆様にとって、これから始まる学校での生活が明るく楽しいものになることを心から願っています。また、新規に着任された先生方には、子供の成長・発達に責任感を持って精一杯尽力されることを期待しています。

さて、コロナ禍も3年目を向かえました。一昨年は、新型コロナウィルス感染症のパンデミックに怯えながら全国の学校が休校措置でスタートし、その後も感染拡大が落ち着くことはなく、感染者の増減に一喜一憂する日々が続いています。この間には、ワクチンが開発されるとともに、今や3度目の接種が進んでいます。その結果として、当初より感染者数が増えているにもかかわらず、罹患する恐怖は薄れつつあるように思います。国民全体がコロナとの共存に慣れてきたように感じているのは私だけではないでしょう。

コロナ禍は、今までにない新しい生活様式や価値観等を私たちに与えたようにも思います。検温や手指の消毒・マスクの着用などの日常の健康管理も当たり前の習慣となりました。感染しない・させないことが自分でなく他者の命をも守るという考え方方が定着し、こうした生活様式や価値観を当然のように受け止めてなおかつ実践する日々を過ごしています。また、定時に登校することが当たり前であった学校生活に時差登校や在宅でのオンライン授業が加わりました。特にオンラインによる学習スタイルは、その後学校間や海外との交流等を実現するための重要な手段になりました。

こうした生活様式や価値観等の変化は、新たな文化が生まれるきっかけとなります。まだコロナ禍は続くと思われますが、この状況を前向きに捉えて、もうしばらく頑張っていきましょう。

附属学校教員研修会・研究発表会を開催しました

東京キャンパス事務部企画推進課 宇留野安紀子

3月7日～31までの間、オンデマンドにより令和3年度の教育局主催による附属学校教員研修会及び研究発表会を開催しました。教員の働き方改革が叫ばれる昨今、従前まで行っていた一日対面型では、内容を共有することが不十分であることと、休日出勤により教職員にかける負担が大きいといった課題を抱えていてたことから、初の試みとしてオンデマンド配信という方法を取り入れました。

今回は、研修会として2020東京パラリンピック競泳の金メダリストである木村敬一氏（附属視覚特別支援学校の卒業生で現在東京ガス株式会社勤務）の講演を、研究発表会としては、附属学校群11校がそれぞれ取り組んできた研究活動の概要や大学および附属学校との連携によるプロジェクト研究の内容を映像にして紹介しました。

本研修会・研究発表会は、附属各校の管理職を含む教職員をはじめ、本学教員・学生・保護者だけでなく全国の

教育関係者など約240名の参加者にご視聴いただき、事後のアンケートにおいても参加された方々からは概ね有意義であったとの感想をいただきました。「パラリンピック金メダルへの挑戦」という木村氏の講演の内容は、特に参加された教職員にとっては日々の教育活動の見直しの契機となり、研究発表会は附属学校群各校等の研究成果を発信する良い機会となりました。



研修会講師：木村敬一氏

筑波スタディ1スタまとめ



附属高等学校 教諭
速水高志

本稿は附属高校の総合的な探究の時間「筑波スタディ」の1学年活動報告です。本校では1学年の内容を1スタ、2学年を2

スタと呼び、1スタでは基礎講座と予備研究、2スタで本研究という流れで探究の時間を構成しています。

1スタ前期の基礎講座では、研究テーマへのアプローチとして、自分の興味関心を深堀りしたり、問い合わせたり絞ったりする中で、自分が本当に研究したい問い合わせを見つける方法を体験し、問い合わせに対する先行研究の調べ方や研究成果のまとめ方を学びました。

後期の予備研究は17人の1スタ担当教員がそれぞれ13~17名の生徒を受け持つゼミ形式で行いました。教員がある程度の大まかなテーマを示し、そこから生徒たちが問い合わせを見つけて、教員のガイドがある程度受けられる研究活動を経験することで、基礎講座で学んだ知識・技術を実戦形式で体験しました。最終的に他のゼミの生徒に向けたスライド発表と、予備研究の内容を論文形式にまとめることで1スタを締めくくりました。

今年の2スタでは、新たなテーマに取り組むことはもちろんですが、1スタの予備研究のテーマを本研究で継続することも可能となりました。新たなスタイルの1スタで学んだ生徒たちが、今年の2スタでどのような研究をするのかとても楽しみです。



ようちぶまつり

附属視覚特別支援学校幼稚部 教諭 **三浦佳菜江**



本校幼稚部には、「ようちぶまつり」という行事があります。日頃取り組んでいる歌や楽器、運動遊びの様子をご家族の方々に観ていただく機会であり、幼稚部の発表会です。

昨年度は、令和3年12月11日に実施しました。感染症対策のため、登校曜日が異なる幼児が全員集まる行事を開催することができず、このようちぶまつりが幼稚部全員が揃う初めての行事でした。

オープニングでは、ご家族の方と一緒に手遊びに親しました。その後、学年毎に分かれて合奏を発表しました。3歳児さんはタンバリンで「おもちゃのマーチ」、4歳児さんは鈴で「おもちゃのチャチャチャ」、5歳児さんはハンドベルで「きらきらぼし」を演奏しました。また、幼稚部全員でヤギに扮し、「たくさんのやぎのがらがらどん」というタイトルで劇遊びにも取り組みました。当日は、星祐子校長先生がトロルを演じてくださいました。幼稚部のヤギさんたちは、平均台やはしごの橋を渡り、トロルめがけてボールを投げたり転がしたり、皆で力を合わせてトロルをやっつけることができました。最後はお家の方と一緒にふれあい遊びやリズム体操を行い、楽しく体を動かし遊びました。

3歳児さんは、初めての行事に少しドキドキ緊張した様子でした。5歳児さんは、司会も担当し、最年長として頼もしい姿を見せてくれました。皆が元気に参加することができ、幼稚部全員で楽しい一日を過ごすことができました。

お家人と楽しむ
ふれあい遊び



画面の向こうからの参加

附属小学校 教諭 森本 隆史

2021年12月、令和3年度の「卒業生を送る子ども会」の実行委員会が発足しました。

「夢の花を満開に」

テーマが決まり、イメージがどんどん広がっていきました。

しかし、年が明けると、新型コロナの感染拡大に伴い、子どもたちが登校すること自体、難しくなってしまいました。順調だったスタートから、一気に追い詰められました。

時間はどんどん過ぎていきました。音楽の先生の力もお借りしながら、最後の二週間で、すてきなダンスと歌が完成し、あとは、金曜日の午後に講堂を飾りつけて、月曜日を迎えるだけというところまでたどり着きました。

ここでわたしのクラスは、午後から飾りつけをすることなく下校することになりました。学級閉鎖。この時点では、月曜日は登校できる予定でしたが、送る会当日も学級閉鎖になることが日曜日に決りました。

涙が溢れました。

あんなにがんばってきた子どもたちの姿を6年生に直接見てもらえないと思うと。

月曜日も何度も涙が出てきました。

子どもたちはZoomで参加しました。しかし、会場で歌う歌声とZoom上の音がどうしてもずれてしまうので、そのときは音を切ることを伝えました。子どもたちはがっかりしていました。その表情を見て一度。ステージ左のスクリーンにはZoomで家から参加する子どもたちを映していました。画面の向こうで、一生懸命歌って、踊っている姿を見て二度目の涙がほほを伝いました。

時間の流れが止まってくれない中、前を向き、突き進む子どもたちに、会場は大きな拍手をくれたのでした。



PC上で参加している子どもが映っているスクリーン

思い出作ろう、お別れ遠足

附属久里浜特別支援学校 教諭 若林 季

幼稚部の年長組で、動物園へお別れ遠足に行きました。感染症対策をしながらの実施となりました。事前学習を始めた頃から、毎日、カレンダーとしおりを並べ、「14日、金沢動物園。」と言って、遠足を楽しみにしている子がいました。また、動物園の入り口に、薄暗いトンネルがあることから、事前学習でそのトンネルの動画を見てから当日を迎えるました。当日は天気も良く、憧れのスクールバスに乗って出発しました。動物園では、保護者の方と一緒に、たくさんの動物を見ることができました。テナガザルの動きやカバの大きさに興味をもち、ガラスの前にみんな集まって、しばらく足を止めたり、カモシカのパネルから顔を出して写真を撮ったりしました。満開の河津桜の下でお昼ご飯を食べました。家庭ごとに距離を取ってのお弁当でしたが、これまで遠足ではあまりお弁当が食べられなかった子も、シートや椅子に座ってたくさん食べることができ、成長を感じました。動物園をたくさん歩き、たくさん食べた後も子どもたちは元気いっぱい、帰るのを名残惜しむように、出口付近の広場で遊んでから帰りのバスに向かいました。

感染症の影響で、日程をずらしたり参加者の距離をおいたりしながらの実施でしたが、対策を講じながらお別れ遠足を実施することができ、よい思い出となりました。幼稚部での思い出を胸に、それぞれの進学先で活躍してほしいと思います。



広場で遊んでいる様子



サイを夢中で見ている様子

「ミライの体育館®」を使った交流及び共同学習



「とらからにげろ！」ゲームに取り組む大塚小学部の児童

「学習」に取り組んでいます。2年ぶりに実現した交流会は、令和4年1月29日に行われました。

この企画は駒場高校の課題研究「障害科学：ともにいきる」の生徒の皆さんに2グループに分かれ、筑波大学人工知能研究室の鈴木健嗣教授の指導の下、プレゼンテーションソフトを駆使してゲームを制作するところから始まります。

交流会当日は感染対策のためにゾーニングを行いました。駒場高校の生徒の皆さんのがゲームの説明を行い、2つのプロジェクトマッピングのゲームを大塚の子どもたちが取り組みました。全ては紹介できませんが、ゲームのうちの一つは壁

附属大塚特別支援学校小学部は、附属駒場高等学校（駒場高校）と「ミライの体育館®」を使った「交流及び共同学習」に取り組んでいます。

面に投影された色や形と同じものを床面に投影された4つの選択肢から選び取っていくゲームです。最初は単色で単純な四角ですが、色が増えたり四角の形が変化したりしてだんだん難しくなります。そして最後はよく見ると…様々な国の国旗に！大塚の子どもたちは映像を見ることが大好き！床面に出てきた画像にわれさきにとかけていく姿がなんとも一生懸命で可愛らしいのです。以前のように手を取り合って活動できなくとも、大塚の児童も駒場高校の生徒さんも自身の理解度に合わせて頭や体を動かしながら楽しく考えて判断・表現する場面があり、そして自然に知識・技能の学びが深まっていく。そんな時間となりました。

挨拶をする駒場高校「ともにいきる」ゼミの皆さん



駒場の探究—教科の枠にとらわれない授業——イネを通した学び—

附属駒場中・高等学校教諭 生物科 内山智枝子



中学1年生 イネに関する探究活動

イネは身近に在り過ぎて、日常ではあまり気に止めることがない存在かも知れない。しかし、一度、着目してしまうと、大変興味深い生物であることに気づかされる。

本校では毎年、中学一年生と高校一年生がケルネル水田にて稲作を行い、併せて水田学習に取り組んでいる。この水田学習では稲作のノウハウだけでなく、ケルネル水田の歴史についても学習し、教科の学習活動でも関連付けた授業を開いている。例えば、中学一年生であれば、イネを科学的な視点で観察し、観察を通して生じた問い合わせ自ら解決することを試みる探究活動に取り組んだ。また、高校一年生では、播種から収穫だけではなく、

固形燃料を用いて自ら炊飯し、何気なく口にしているご飯の有難さを味わった。さらに、高校二年生の生命科学の授業では、本校で栽培しているキヌハナモチだけでなく、他の品種と種子の形や色、炊いた時の食感などの形質を比較し、その形質を発現する遺伝子をPCR反応や電気泳動によって分析する授業を開催、イネを通して変異とは何かを学習した。これまで人の手によって多様化してきたイネは、これからどのように変遷していくのか、まだまだ謎が多く魅力的な生物である。今後は科学的な視点だけでなく、様々な視点でのアプローチを考えていきたい。





本年度から制服が新しくなりました

附属坂戸高等学校 副校長 深澤孝之

新しい制服は、生徒一人ひとりの多様な個性を表現する「ダイバーシティ」をコンセプトとしています。多様な社会とのつながりの中で生きる筑坂生を表すために生徒一人ひとりを一本の糸になぞらえ、様々な色の糸を折り重ねて作られた複雑で深みのあるミックスネイビーを生地に採用しています。また、「進化し続ける伝統」をブランドコンセプトとするJ.PRESSを採用することで、本校がこれまで培ってきた伝統を大切にしながら、よりよい未来に挑戦することを表現したいと考えました。一方、これまでの制服は伝統にもとづく大変格式の高いデザインでした。長く続く伝統を変えることに対して、批判的な声をいただくことになるかもしれません、私たちはその声を真摯に受け止め、様々な声には教育実践の評価をもって応えていけるよう責任を持って努めていきたいと考えています。



新しい制服の新入生



卒業・修了:新たなステージへ

附属聴覚特別支援学校 主幹教諭 鎌田ルリ子

令和4年3月、幼稚部8名、小学部12名、中学部14名、高等部普通科25名、専攻科修了生12名の71名が卒業・修了を迎えました。

国府台の学び舎を離れ、新たなステージに進む高等部普通科の卒業生と専攻科修了生の中には、乳幼児期から15年以上もの年月を本校で過ごした生徒たちがおり、旅立ちへの感慨はひとしおです。生徒たちは、この2年間新型コロナウイルス感染症に対応し、制限の多い学生生活を余儀なくされ、数々の悔しい思いをしました。しかし、その代わりに仲間と共に知恵を出し合うこと、新たなスタイルを生み出し楽しむ経験を重ねてきたといえるでしょう。だからこそ柔軟な発想ができる逞しい生徒に成長したと感じます。

卒業式にご臨席いただいた永田恭介学長からは、「自分の良いところを一層伸ばし、今の方に一層磨きをかけてそれぞれの場所で活躍してほしい。」とのメッセージをいただき、卒業生・修了生にとって思い出深い門出となりました。



附属聴覚 卒業式



令和3年度 理療科教員養成施設 臨床専攻生・理療研究生修了式、施設学生卒業式

理療科教員養成施設 講師
徳竹忠司



施設学生卒業式
特別支援学校自立教科一種免許状授与

理療科教員養成施設の教育プログラムには、3つのコースがあります。●施設学生：視覚特別支援学校自立教科教諭一種免許の取得を目指すコース（修業年限は2年間）。●臨床専攻生：東洋医学的物理療法に関する基礎的・臨床的な研究指導を受けるコース（修業年限は1年間）。●理療研修生：はり・きゅうの国家資格取得後の臨床研修コース（研修期間は年ごとに更新可能）となっています。昨年度末に11名の施設学生が2年間の就業を終え卒業しました。本学年は入学時から感染対策に翻弄された2年間を送りました。卒業式の直前に濃厚接触者となり、残念がっておりましたが欠席となってしまった学生がいました。臨床専攻生・理療研修生も修了式を終え、新たなフィールでの活動を目指し巣立っていきました。



臨床専攻生・理療研修生修了式 修了証書授与



施設学生卒業式 大会議室

第50回肢体不自由児教育実践研究協議会を終えて

附属桐が丘特別支援学校 教諭 橋本 陸



2月4日・5日に「第50回肢体不自由児教育実践研究協議会（以下、協議会）」を実施しました。協議会は「子供の可能性が広がる新時代の学び」をテーマとし、令和2年度に引き続きオンラインで開催しました。参加申込者は2日間で延べ242名であり、多くの肢体不自由教育関係者にご参加いただきました。

1日目は、文部科学省初等中等教育局特別支援教育調査官である菅野和彦先生に「肢体不自由における新時代の学び」、当校校長（当時）である下山直人先生に「未来の肢体不自由教育への提言」をテーマにご講演いただきました。また、新たに企画した「基礎講座」では、研究者や当校の教員を講師とした12の講座を用意し、肢体不自由教育にまつわる諸課題（各教科の授業づくり、自立活動の指導、ICTの活用など）について実践を基に講義を行いました。2日目は、「『他者との学び合い』を創るオンライン授業（遠隔合同授業）」、「知的障害を伴う子供の教科指導」をテーマとした2つの分科会を行いました。当校を中心とした実践を発表し、それを踏まえて全国各地の参加者とオンラインで活発な協議を行うことができました。

講演・基礎講座についてはオンデマンド配信も行いました。参加者アンケートの結果でも「他の基礎講座も見たかったので良かった」「もう一度講演を聞きたい」などのご意見をいただいており、その利点を感じました。

本年度の研究協議会も、2月にオンラインで開催を予定しております。多くの先生方のご参加をお待ちしております。



3年生ファイナルコース

附属中学校 3年ファイナル担当 関谷文宏



佐藤可士和さんにその場で質問

3年生は毎年、卒業式前の1週間、ファイナルコースという活動を行っています。卒業を前に3年間をふり返り、これからの生活につなげていくものです。

今年は、FINE ALLというスローガンを掲げ、学級委員からなるコース委員が、5日間の企画・立案・実行を担当しました。

初日は、「命」について考える活動・校長講話などを実施し、2日目は、翌日の校外活動の準備やクリエイティブディレクター佐藤可士和さんによる特別講演を行いました。

3日目は八景島シーパラダイスでの校外活動を実施しました。思えば約2年間、宿泊行事ができなかった学年でした…。4日目は、午前スポーツ大会、午後卒業生歓送行事で、久しぶりに校内に歓声が響きました。後輩たちが作った手作りの花道を進む3年生と迎える1・2年生。きっと両者の様々な思いが交錯したことでしょう。

最終日は旧クラスでの活動の後、卒業宣言。自分の思いを飾らずに表すことができ、信頼し合える友がいる学級ができていると感じました。

卒業式当日、大アリーナでの式の後、各クラスで卒業証書を授与。なかなか帰ろうとしない3年生の姿に、担任一同皆さんの前途に幸多かれ、と思わずにはいられませんでした。





第17回「科学の芽」賞

第17回 朝永振一郎記念
科学の芽賞

募集!

作品募集
朝永先生の言葉のように
自然現象の不思議を発見し、
観察・実験して考えたことを
まとめましょう。楽しい経験や発見が
あるものを募集します。

8/22月→9/17土

応募期間
小学校3年生~、中学校、義務教育学校、高等学校(准許者登録
済みの者を含む)、中等教育学校、特別支援学校の個人もしくは団体
による応募。今年度受賞者、審査員の既往歴者を除く。

応募条件
レポート用紙(A4判 片面)10枚以内
提出する用紙は複数枚でも構いません。一枚に複数の内容を記載しても可
能です。複数枚提出の場合は、各用紙に記入して下さい。

審査方法
筑波大学教員、筑波大学附属学校教員及び
後援団体関係者などが審査・選考

審査結果発表
2022年11月4日(祝)筑波大学ホームページにて掲載

賞・表彰品
「科学の芽」賞の受賞者には学長より賞状と記念品を贈呈
「その他」賞(研究賞・英語賞等がござります)へは賞状と記念品を贈呈します。

審査式・開式式
2022年12月17日(土) 筑波大学

応募方法
附属学校教育局ホームページ(<http://www.tsukuba.ac.jp/kagakunome/>)
内の「科学の芽」賞のページ「申し込みフォーム」より必要事項を
入力し、出力されたPDFを作成の一覧上に貼り、下記住所まで
ご送付ください。

送付先
〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1
筑波大学「科学の芽」賞 実行委員会 (本事務局は実行委員会の運営に専念)
主催
筑波大学
後援
日本農業科学院、内閣府、文部科学省、日本科学教育学会、日本理科教育学会、
日本数学学会、日本物理教育学会、日本化学会、日本生物教育学会、日本地質学会、日本地質
教育学会、日本地質科学教育研究会

お問い合わせ
筑波大学「科学の芽」賞 実行委員会 〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1
E-mail: kagakunome@un.tsukuba.ac.jp

03-3942-6806

QRコード

詳しくは、筑波大学ホームページ「科学の芽」賞 を参照
<https://www.tsukuba.ac.jp/community/students-kagakunome/>

科学の芽賞に
描いた作品集

2022年7月発行

2022年8月発行

2022年9月発行

<https://www.tsukuba.ac.jp/community/students-kagakunome/>

●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia(後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む)こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名(Paulownia imperialis)に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。



vol.54

発行日……令和4(2022)年5月31日

発行者……附属学校教育局教育長 溝上智恵子

発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌
広報戦略推進委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800

デザイン……スピーチ・バルーン

印 刷……広研印刷 使用紙: U-limax [日本製紙]

